

天台文献に見られる地論・撰論学派の心識説

——智顗と湛然の著作を中心に——

吉 村 誠

序言

中国唯識思想史の問題の一つに、地論学派の南北両道と撰論学派との関係をどう見るかというものがある。一般には地論北道派が撰論学派と合して消滅したという説が行われているが、近年ではこれが歴史的事実ではないことが確認されている⁽¹⁾。すなわち、地論北道派は『撰大乘論』が北地に伝播する前に消滅しており、撰論学派に移行したのはことごとく地論南道派の人々であった⁽²⁾。心識説についても地論南道派と撰論学派との間に対応関係があることが分かっている⁽³⁾。

それでは何故に誤った説が行われたのかといえ、それが基づいた資料——『法華玄義釈籤』の一節——に問題があるからである⁽⁴⁾。小稿ではこの問題を明らかにした上で、天台文献にみられる九識説について考察することにした。

一 智顗と湛然の地論・撰論学派に対する理解

問題の箇所は、智顗（五三八—五九七）の『法華玄義』に注釈した、湛然（七一—七八二）の『法華玄義釈籤』の一節である。智顗は、

如地論有南北二道、加復撰大乘興。各自謂真、互相排斥、令墮負⁽⁵⁾。

といい、地論学派に南北があり、さらに撰論学派が興り、互いに争ったと述べている。後述のように、智顗は常に地論学派と撰論学派を対比して捉えているため、この文も両者が争ったという意味で理解すべきである。しかし、湛然はこれを地論学派の南道と北道の争いと捉え、次のように注釈する。

如地論有南北二道者、陳梁已前、弘地論師二処不同。相州北道、計阿黎耶以為依持。相州南道、計於真如以為依持。此二論師俱禀天親、而所計各異同於水火。加復撰大乘興、亦計黎耶以助北道。又撰大乘前後二訳、亦如地論二計不同。旧訳即立菴摩羅識、唐三

藏訳但立第八⁽⁶⁾

これによると、北道が黎耶依持（阿黎耶識が一切法を生ずる）説であるのに対し、南道は真如依持（真如法性が一切法を生ずる）説で、お互いに争った。そこに撰論学派が興ったが、彼らは黎耶依持説をとったので北道を助けることになったという。さらに、南道の説は真諦訳の九識説に、北道の説は玄奘訳の八識説に、それぞれ比せられている。⁽⁷⁾

この湛然の注釈には問題がある。たしかに撰論学派には阿黎耶識が一切法を生ずるという思想があり、その点に限定すれば、地論北道派や玄奘訳の阿黎耶識と似ているともいえる。しかし、撰論学派では阿黎耶識を如来蔵とみなしたり、阿黎耶識の他に第九阿摩羅識を立てたりする。地論北道派や唯識学派ではそのような解釈はしないので、これらの心識説を同一視することは誤りであるといつてよい。反対に、撰論学派の九識説は一種の真如依持説であり、むしろ地論南道派の説に近いといえる。このことから、撰論学派が北道派を助けたというのは事実ではなく、智顗の記述をもとに湛然が作り上げた虚構であることが分かる。湛然は地論・撰論の時代から百年以上も離れているため、両者の関係を正確に把握することはできなかったのであろう。

これに対し、智顗は地論・撰論の時代に生きていたため、両者の関係をかなり正確に把握していた。『摩訶止観』では

次のようにいう。

地人云、一切解惑真妄依持法性。法性持真妄、真妄依法性也。撰大乘云、法性不為惑所染、不為真所淨。故法性非依持。言依持者阿黎耶是也。無没無明盛持一切種子。若従地師、則心具一切法。若従撰師、則縁具一切法。⁽⁸⁾

智顗によると、地論学派は真如法性が一切法を生ずるという説であるのに対し、撰論学派は阿黎耶識が一切法を生ずる説であったという。前者は地論南道派の説である。つまり智顗は、地論南道派が真如依持説であるのに対し、撰論学派は黎耶依持説であり、お互いに争ったと述べているのである。⁽⁹⁾ただし、智顗はあくまでも両者の阿黎耶識の解釈の違い（地論南道派は真妄和合識、撰論学派は妄識とみる）のみを問題とし、撰論学派の九識説と地論南道派の真如依持説とが似ていることについては言及しない。それは智顗が独自の九識説を、地論南道派と撰論学派の対立を調停するものとして提示するためである（後述）。

智顗は「此両師各執一辺。…中略…云何偏執法性黎耶生一切法⁽¹⁰⁾」といい、両者の解釈はいずれも偏っていると主張する。特に撰論学派の阿黎耶識については「若具一切法者、那得不具道後真如。若言具者、那言真如非第八識⁽¹¹⁾」といい、たんなる妄識ではないと非難している。そして『維摩經玄疏』では、両者の争いを調停して次のようにいう。

天台文献に見られる地論・撰論学派の心識説（吉村）

一八六

問曰。撰大乘論説、阿黎耶識は無記生死根本。何関真性解脱耶。答曰。若爾、与地人用楞伽經、豈不頌相逆。今研両家所執、互有得失。若言阿黎耶識非本性清浄者、撰大乘論何故云、如地即是金土。黎耶識亦爾。染同於土、浄同於金。故知義通二辺。何両家偏執。今説、黎耶識、即是真性解脱者如金、是生死根本者如土⁽¹²⁾。

ここでは、阿黎耶識は生死の根本であるのに何故に真性解脱とも関わるのか、という問いが起こされる。答えには『撰大乘論』の金蔵土の譬喩が引かれ、阿黎耶識は染にも浄にも通じるので、生死の根本にもなり、真性解脱にもなると説明されている。金蔵土は本来三性説⁽¹³⁾についての譬喩であるが、智顗はこれを心識説に適用し、阿黎耶識を如来蔵的に解釈しているのである。この解釈は一見すると地論南道派の真妄和合説に似ているが、智顗にとっては全く異なるものであった。金に譬えられる真性解脱としての阿黎耶識とは、すなわち第九菴摩羅識のことであり、それは地論南道派の知らない觀念だからである。

二 天台文献に見られる九識説

智顗は撰論学派の九識説を知っていた。しかし、それは撰論学派の説としてではなく、地論南道派と撰論学派の争いを調停する、智顗自身の説として提示される。例えば『法華玄義』には次のようにある。

類通三識者、菴摩羅識即真性軌、阿黎耶識即觀照軌、阿陀那識即資成軌。…中略…若阿黎耶中、有生死種子、熏習增長、即成分別識。若阿黎耶中、有智慧種子、聞熏習增長、即轉依成道後真如、名為淨識。若異此両識、祇是阿黎耶識。此亦一法論三、三中論一耳。撰論云、如金土染浄。染譬六識、金譬淨識、土譬黎耶識。明文在茲、何勞苦證⁽¹⁵⁾。

智顗のいう三識とは、第七阿陀那識・第八阿黎耶識・第九菴摩羅識のことである。阿黎耶識中の生死の種子が熏習によつて増長すると分別識（阿陀那識）となり、智慧の種子が聞熏習によつて増長し、転依して道後の真如を成ずると淨識（菴摩羅識）となる。すなわち三識は一法であり、そのことは金蔵土の譬喩によつて証明されるという⁽¹⁶⁾。このように智顗は、依他性（第八識）が分別性（第七識）とも真実性（第九識）ともなるといふ二分依他の九識説を説いている。これは撰論学派が、分別性（第七識）と依他性（第八識）とを捨遣すること（第九識）であるとする境識俱泯の九識説をとることとは異なっている。

智顗はまた、『金光明經玄義』で三識を三觀に配当する、いわゆる觀心釈を説いている。

觀心明三識。論金光明者、諦觀一念心、即空即假即中。即是觀心識於三識。…中略…一念識中、三觀具足。識於三識、亦不得三識觀。…中略…以照識性故、是菴摩羅識。照識如故、是阿梨耶識。亦照亦滅故、是阿陀那識。是名觀心中三識金光明⁽¹⁷⁾。

ここでは一心三觀が「心を觀て三識を識る」こととされ、三識（第七・第八・第九）に三觀（仮觀・空觀・中觀）がそれぞれ配当されている。これを三識三觀説と称することにする。智顗はまた、「当知三識一一皆常樂我淨、与三德無二無別」といい、三識を三德（解脫・般若・法身）にも配当している。このように、智顗は撰論学派の九識説を読み替えて、それを天台教学と結びつけた。

湛然はこの解釈をさらに進め、三識を三身（化身・報身・法身）・三因（仏性（縁因・了因・正因）・三智（方便智・觀照智・実相智）などに配当し、それぞれが円融していることを積極的に主張した。

湛然が新たに直面した問題は、玄奘の新訳による唯識教学との矛盾である。唯識学派では八識説や轉識得智説を正当とするが、それらは智顗の九識説や三識三觀説とは相容れないものであった。この問題について、湛然は『法華玄義釈籤』で次のように述べている。

若準唯識論、轉於八識以成四智。又東四智以成三身……中略……此中不取第九。乃是教道一途屬對不與今同。何者、彼居位果三身仍別。此在因位三身互融。即此三身祇是三德。三德攝內三身約外。今從初心常觀三德。故与彼義不可雷同。……中略……言轉依者、轉於染依而依於淨。是故在染則種子依於黎耶、在淨則轉於能法以成第九。当知黎耶不離染淨。

すなわち、唯識では果位において三身を分別するが、天台

天台文献に見られる地論・撰論学派の心識説（吉村）

では因位において三身が円融するとみる。三身は三德のあらわれであり、修行者は一心に三德があると觀じる。故に唯識の教義に雷同することはできないという。また、轉依についても、唯識のように八識が四智になるという意味ではなく、阿黎耶識が染淨の双方に轉ずることであるという。『止観輔行弘決』でも「論家雖云翻識為智、而不即照三識一心。即此一心三智具足」といい、唯識学派は識が轉じて智と為るというが、三識は一心であり、一心には三智が具わっているという。このように、湛然にとって九識説は智顗の説であり、天台教義として^{（19）}忽せにできないものであった。

さらに湛然は、九識説の正当性を証明するために、真諦の名前をあげて玄奘の名声に対抗した。^{（21）}九識説を真諦が説いたとみなすのは、撰論学派がとった方法と同じである。湛然は唯識学派に対抗して智顗の菴摩羅説を擁護した結果、おのずと撰論学派の立場に近づいてしまったのである。

天台の九識説は知礼（九六〇—一〇二八）に継承された。知礼は『金光明經玄義拾遺記』や『金光明經文句記』で智顗の三識三觀説を説き、三識を三德・三智・三因（仏性に配している^{（22）}）。その中で、知礼は菴摩羅識を空・不空や能・所という対概念で説明しているが、これは延寿（九〇四—九七五）の『宗鏡録』に引用された撰論学派の九識説を参照した可能性が考えられる。^{（24）}

結語

智顗（五三八―五九七）の著作では、地論南道派と撰論学派の阿黎耶識が対比的に捉えられているが、それは両者の対立を調停する独自の九識説を提示するためであった。湛然が智顗の記述から撰論学派が地論北道派を助けたと理解したが、それは歴史的にみて誤りである。

智顗は、『撰大乘論』の二分依他說や金藏土の譬喩にもとづいて、第八阿黎耶識が妄なる第七阿陀那識や真なる第九識菴摩羅識に転じるという九識説を主張した。また、この説を天台教義に取り込むため、三識を三觀や三徳に配する解釈も行った。智顗の心識説は、湛然や知礼の著作に継承されている。

撰論学派の九識説は、玄奘の唯識教学によつて否定されながら、天台教義の一部として生き続けた。同じことは華嚴文献や偽経においても検証できるであろう。九識説が長い命脈を保ったことは、中国仏教の一つの性格を示すものとして興味深い。

- 1 例えば、境野黄洋『支那仏教史講話』上（共立社、一九二七年）三三八頁、勝又俊教『仏教における心識説の研究』（山喜房佛書林、一九六一年）六八一頁、鎌田茂雄『中国仏教史』（岩波

書店、一九七八年）一二五頁など。

- 2 里道徳雄「地論宗北道派の成長と消長」（『大倉山論集』一四、一九七九年）、結城令聞「地論宗北道派の行方」（『東方学論集』、一九八七年）参照。

- 3 拙稿「撰論学派の心識説について」（『駒澤大学仏教学部論集』三四、二〇〇三年）参照。

- 4 このことは青木隆「地論宗南道派の真修・縁修説と真如依持説」（『東方学』九三、一九九七年）で指摘されている。

- 5 『法華玄義』大正三三、七九二a。

- 6 『法華玄義釈籤』大正三三、九四二c。

- 7 同様の説は『法華玄義釈籤』大正三三、八五八c、『法華文句記』大正三四、二八五aにも見られる。

- 8 『摩訶止観』大正四六、五四a。

- 9 同様の説は『維摩経玄疏』大正三八、五五二a、『法華玄義』大正三三、六九九cにも見られる。

- 10 『摩訶止観』大正四六、五四a―b。同様の説は『維摩経玄疏』大正三八、五二八bにも見られる。

- 11 『法華玄義』大正三三、七四二b。

- 12 『維摩経玄疏』大正三八、五五三a―b。

- 13 三性説を心識説と連絡する解釈は、撰論学派で盛んに行われていた。拙稿「真諦訳『撰大乘論釈』の受容について―三性三無性説を中心に―」（『印仏研』四九―二、二〇〇一年）参照。

- 14 ただし『維摩経玄疏』では八識説で解説されており、第九菴摩羅識は説かれていない。

- 15 『法華玄義』大正三三、七四四b―c。

- 16 智顗は『金光明経玄義』の中で金藏土の譬喩を「円説」（大正三九、五c）と評している。ただし譬喩の説明には混乱がみ

られる。

- 17 『金光明經玄義』 大正三九、七c。
- 18 『金光明經玄義』 大正三九、四a。
- 19 『法華玄義釈籤』 大正三三、八九九a。
- 20 『止観輔行弘決』 大正四六、二二一c。
- 21 同上。
- 22 『金光明經玄義拾遺記』 大正三九、二六a—b、『金光明經文句記』 大正三九、一三〇c—一三一a。
- 23 『金光明經玄義拾遺記』 大正三九、三四b。
- 24 趙宋天台の背景には延寿の教学があることが指摘されている。池田魯参「趙宋天台学の背景—延寿教学の再評価—」(『駒澤大学仏教学部論集』一四、一九八三年) 参照。

〈キーワード〉 阿黎耶識、菴摩羅識、九識、智顗、湛然

(駒澤大学准教授・博士(文学))

天台文献に見られる地論・摂論学派の心識説(吉村)

新刊紹介

植木 雅俊 訳

『梵漢対照・現代語訳 法華経 上下巻』

A五版・(上) 六二八頁・定価五、二〇〇円
(下) 六五八頁・定価五、二〇〇円
岩波書店・二〇〇八年三月